

少しの安心感

数学について、自分にはなんとなく欠けている能力があると思った。論理的な思考をする速さが極めて遅いのである。多くの人もそのように感じているらしいが、私のはとくにひどいような気がする。しばしばこれは致命的ではないかと思った。確かにそれはそうで、これでは非の打ち所なく優れた数学者には決してなれない。院に入ったころは優れた数学者になろうとしていたので、数学がいやになった。元来、私は調子よくやっているときは力を出す。が、一度つまづくとやる気をなくす気質だったので、どうしたらよいのかわからなくなった。しかし、いったんだめになると案外気楽なもので、自分のやりたいようにやればいいじゃないか、数学なんて所詮その程度のものだと思うようになる。すると今度は自分の良いところを活かすしか道はないと思うようになった。

セミナーで話したり、人の話を聞いたりするのは苦手だったが、自分で考えるのは好きだったから、数学の素養がないままぼんやりと考えるようになった。自己弁護から「対象をぼけさせることによりアイデアに広がりができる」と言ったこともあるが、賛同してくれる人はあまりいなかった。もちろん、わざとぼかすのではなく、いくらがんばっても始めからぼんやりしているのである。しかも、アイデアとは名ばかりで、もともとあやふやなところから出発しているので、ほとんどは屑同然で、夜のあいだは興奮できるが、つぎの日にははかなく消えるという類のものである。それでも、勉強するよりは考えているのが楽なのでついつい続けていると、希に生き残るものがでてくる。これをどうにかしないと自分の価値がなくなってしまうので大切にしようとした。そのかたちがだんだん明確なものになっていくときが一番うれしく感じる。また、そのときは使えなかったが、いつも気にとめておくと後で思わぬところに結び付くことがある。結局、はじめは意識しなくても、通過できない箇所は決まっていて、同じようなテーマを考えていると必ずそこに立ち帰ってくるようにできているらしい。

数学者を見ていると、コンピューターにたとえば、数学的情報をテキストとして保存しているタイプと画像として保存しているタイプがあるような気がする。私はどちらかという後者であると思う。画像タイプはデータの作成、加工、修正、取り出しに時間がかかり、しかもメモリーを大量に必要とするので一度に大局的な処理をすることはできない。他人と討論したり、セミナーで話したり、論文にまとめたりするためには、その画像を共通のテキストスタイルに変換しなければならないので、ここでも多量の時間を要する。CPUが遅い場合はなおさらである。しかし、局所的にはいいイメージがあるので、ハードディスク内のファイルの整理がうまくいけば何かできる可能性がある。

私のハードディスクは容量が十分に残っている。時間はかかるが、時間も十分にある。私は、いい仕事は若いときにしかできないとか、年をとると新しいことは勉強できなくなるとかいう意見には反対したい。それは自分にはあてはまらないと思う。数学のやりかたは千差万別で、人はそれぞれ自分に合った好きなスタイルでやればいいと思う。今回の賞は奨励賞ということで、これは完全に個人を励ますために存在するものだと解釈すれば、今までやってきたことはほんとうをいえば不安であったが、まあいいからその調子で続けていきなさいと言われていたようで、今は少しは安心している。